

リベラルアーツを基盤に グローバル化に対応した教育を展開

国際教養大学学長 中嶋嶺雄

学士課程では 教養教育こそが重要

学士課程教育のあり方を考えるには、高等教育全体をどうすべきかという視点が欠かせない。これからの社会は、高度な知的能力があらゆる分野で求められるようになり、そのような人材の育成という点で、大学院教育への期待が大きい。ところが、日本の大学院教育は欧米に比べてかなり立ち遅れているのが現実だ。学士課程では1~4単位が要求されているのに、大学院では博士課程も含めて30単位。これだけを見ても、日本の大学院教育がいかにおざなりかということがわかる。このままでは、欧米の大学院で勉強した人たちの差は拡大するばかりだ。

2005年9月に出された中教審の答申「新時代の大学院教育―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて」は、戦後初めて大学院の教育に的を絞って提言した。答申では大学院教育の実質化を打ち出しているが、これを充実させようとするほど、学

士課程教育の重要性が浮かび上がってくる。学士課程教育がしっかりと機能していなければ、学問的な深みがなくノウハウやスキルだけに長じた、専門分野しか知らない人間を育成するようになってしまうからだ。

91年の大学設置基準大綱化以降、教養部が解体され、学士課程教育の最も重要な基盤である教養教育が崩壊してしまった。高校を卒業したばかりで、世の中のことを何も分かっていない若者を、いきなり専門の狭い世界に閉じ込めてしまうような教育を行ってきたわけだ。大学院ではさらに高度な専門教育が行われるため、人格形成や学問の蓄積という点で大きな問題がある。

今こそ、大学院は「広く深い専門教育」、学士課程はそこに接続するための「教養教育」と、はっきりした位置付けをするべきではないか。ここでいう教養教育とは、欧米型のリベラルアーツを基盤としながらも、グローバル化が進む現代社会の実態に即したものでなくてはならない。それが「国際教養」であり、本学が目指している学士

課程教育の理念である。

英語+教養+留学で 国際的に活躍できる人材を

国際教養 (International Liberal Studies) は新しい理念であり、共通の定義もなく、学問分野として確立しているわけでもない。本学は、166ある国立大学の中で唯一、地域の名称がなく、新しい学問分野をそのまま大学名としている。本学が考える国際教養の教育内容は、三つの要素からなる「**次頁図表1**」。これは学生にとっての関門だといってもいい。

第一は、外国語教育とりわけ英語教育だ。グローバル化社会で通用する国際教養を学ぶには、共通語である英語の習得は必須といえる。本学ではすべての授業を英語で行っている。ただし、いきなり英語の授業についていくのは難しいので、入学直後から英語集中プログラム「EAP (English for Academic Purposes)」を実施し、基礎的な能力を養う。

第二は、基盤教育「BE (Basic Education)」で、これが教養教育のコア部分にあたる。幅広い知的バックグラウンドを確立すると同時に、専門教育に必要な基礎教育という要素もある。

第三は、海外留学だ。提携校を含む海外の有力大学に1年以上留学し、30単位前後を修得する。必修のため、留学して単位を取つてこないと卒業できない。

基盤教育の終了後、専門教育として、グローバル・ビジネス課程とグローバル・スタディズ課程を設けている。ここでいう専門教育は、一般教養に対する専門ではなく、あくまでも国際教養の一部と位置付けている。

これら一連のカリキュラムによって、高いコミュニケーション能力と教養を身に付け、内外のトップクラスの大学院で専門教育を受ける、あるいは国際的に活躍できる人材を育成する。

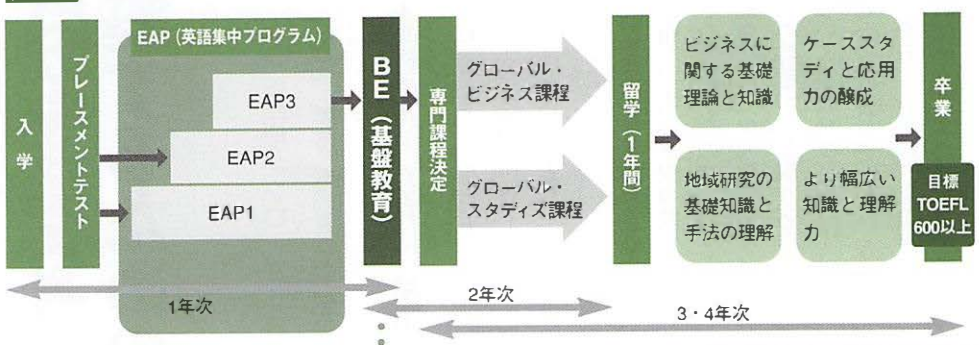
基盤教育を貫く 五つの構成要素

リベラルアーツは、伝統的に大学教育の核心であり、その充実のための取り組みが必要だ。本学では、基盤教育でリベラルアーツの理念を実現しようとしている。基盤教育は、「コミュニケーション科目群」と「グローバル科目群」から構成される**図表2**。

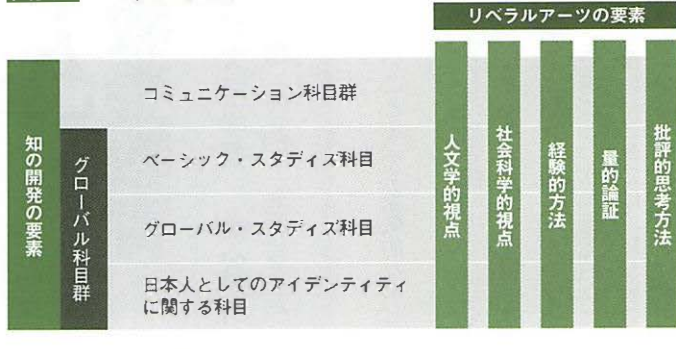
コミュニケーション科目群には、コンピュータリテラシーのほか、英作文やスピーチなど実践的な英語能力を高める科目がある。

グローバル科目群は、「ベシッ

図表1 入学から卒業までの流れ



図表2 BE (基盤教育) のカリキュラム



ク・スタディズ科目」「グローバル・スタディズ科目」「日本人としてのアイデンティティに関する科目」に区分される。ベーシック・スタディズ科目では、社会学、経済学、心理学、文化人類学、世界史などの人文社会科学系から、代数学、統計学、さらに実験を含む物理学、化学までをカバーしている。芸術に触れることも重視し、生演奏を

聴き芸術論を学ぶ、あるいは国際的に知られる美術史の専門家が西洋美術や日本美術について語る、といった授業もある。

グローバル・スタディズ科目は、社会のグローバル化に対応する科目だ。グローバル化は、国境という概念を超えた「ボーダレス」、インターネットの普及で実現した「同時進行型世界」、「地域的アイデンティティの確立」の三つの座標軸で捉えなくてはならない。三つの軸に沿って「異文化間コミュニケーション」「環境科学」「東北文化入門」などの科目を設けた。

日本に関する科目は、主に留学生を対象としたものだが、日本人学生も履

修する。日本の文化や社会について英語で学ぶことで、日本という国を相対的に理解できるようにする。新渡戸稲造の英語による著作「Bushido: The Soul of Japan」(「武士道」)を全学必読文献にし、日本や日本人についての名著5冊を学長推薦の必読書とするなど、日本人としてのアイデンティティを探究するための教材も工夫する。

基盤教育のカリキュラムには、リベラルアーツを推進するための一種の方法論を持ち込んだ。一般に、各科目はそのレベルに応じて縦方向に構成されていて、科目同士の横の連携は希薄だ。本学では、リベラルアーツの要素である「経験的方法」「量的論証」「批評的思考方法」などの手法・視点を各科目に取り込むことによって、科目間の横断的連携を図っている。

このうち、経験的方法はフィールドワークなどを意味する。量的論証は、統計学的に世界を捉える方法で、人口問題などでは特に重要となる。批評的思考方法は、正確な知識に基づいて物事を批判的に見る目を養うことが目的で、ディベートやプレゼンテーションの力につながる。

各科目の担当教員は、これらの視点や手法を共有し、それに沿って授業を進めることで、一貫性のあるリベラルアーツ教育を展開している。

コミュニケーション能力と教養こそが「資格」である

本学のカリキュラムには、国際的な

互換性がある。シラバスには国際ルーに沿って科目番号が振られ、留学先でも学習の連続性や体系性を考えた科目選択が可能だ。これも、国際教養を標榜するうえで重要な要素といえる。

成績は厳しく評価する。EAPをクリアしないとBEに進めないし、TOEFL550点以上をマークしなければ留学できない。600点以上が卒業時の目標だ。履修条件やGPA制度もあるため、学生は本当によく勉強しており、卒業生の実力はかなり高くなると自負している。

今や学歴や学閥による序列が急速に崩れ、本人の実力だけがものをいう時代になりつつある。大学が資格取得に力を入れるようになっていくが、本学はあえてその路線はとらない。国際教養を学ぶことで身に付く幅広い教養とコミュニケーション能力は、それ自体が「資格」だと考えている。

近年、「国際教養」の名を冠した学部設置が相次ぎ、一種のブームの様相を呈している。

英語による授業を前提に、本学が目指すボーダレス化、同時進行型世界、地域的アイデンティティの確立、の三つの座標軸で教育内容が決められるのであれば、大学教育を変える起爆剤として期待できる。

08年度には、グローバルコミュニケーション専攻の専門職大学院を設置する予定だ。学士課程で国際教養を学んだ後の、本来の意味での専門教育の場の一つにしたいと考えている(談)。

Between

明日の大学改革を支援する

2-3月号

2006 No.218

Interview トップの視点

日本大学総長・理事長

小嶋勝衛氏

■ 共立女子学園の財務改革
部門単位の予算運営で収支構造を改善

■ 法人化後、地方国立大学は何をしたか
— 04年度業務実績評価・注目校の報告



特集

「学士課程教育」の構築